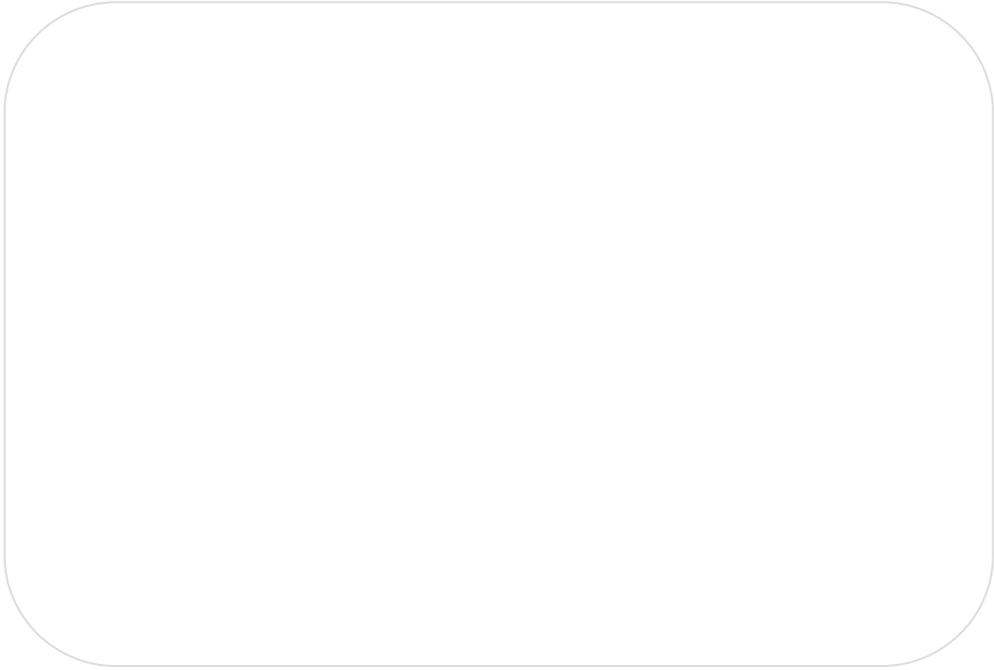




Hitotsubashi University  
Institute of Innovation Research



一橋大学イノベーション研究センター

東京都国立市中2-1  
<http://www.iir.hit-u.ac.jp>



# 英国における創造的転回

『創造的な英国』の「新しい労働」

一橋大学イノベーション研究センター

特任講師 木村めぐみ

## 要旨

本論文では、ブレア政権期以降の英国を事例に創造的転回について検討した。創造的転回とは、知識の問題の解決を前提する、情報技術の進歩への適応のプロセスである。ブレア政権期[1997-2007]とブラウン政権期[2007-2010]の英国では、『創造的な英国 *Creative Britain*』というビジョン(1998)や戦略(2008)を通じて、知識の問題の解決や、情報技術の進歩に対応する重要な論点を示してきた。第一に、労働党政権は、政府と国民の関係性に加えて、国民と科学、芸術、技術との関係性の変化を企てていた。第二に、英国には、科学革命や産業革命を政府、産業、大学が牽引した事実はなかったが、『創造的な英国』は、当時、このような場所の外に見られた関係を創り出すことを政府、産業、大学に求めた。第三に、『創造的な英国』は、仕事の質中心の新しいヒエラルキー（意識）を創造することによって、若くて新しい、創造的な英国の実現を目指す、政府、産業、大学の全てに関わる政策である。英国における創造的転回は、資本主義、社会主義と民主主義それぞれの論理やイデオロギーの限界や矛盾を超えた社会の実現を目指す動きであった。

# 英国における創造的転回

『創造的な英国』の「新しい労働」

一橋大学イノベーション研究センター

特任講師 木村めぐみ

## 1. はじめに

本論文の目的は、ブレア政権期以降の英国を事例に、創造的転回について検討することである。

創造的転回とは、知識の問題の解決を前提する、情報技術の進歩への適応のプロセスであり、これまでの描写されたイノベーションとは異なる、体験されたイノベーション<sup>1</sup>、つまり、創造という社会的プロセスの前提である（木村 2017a, b）。2000 年以降の欧州では、創造的転回を企てるの政府、産業、大学を観察できるようになったが、英国は、その目的や理由までをはっきりと示した国の一つであった。トニー・ブレアは、18, 19 世紀の古い産業革命と、21 世紀の新しい産業革命の違いを通じて、この変化を表現し、若くて新しい、創造的な英国の実現を目指してきた。英国における創造的転回は、いかにして計画され、進められてきたのだろうか。

ブレア政権期[1997-2007]とブラウン政権期[2007-2010]の英国では、『創造的な英国 *Creative Britain*』というヴィジョン(1998)や戦略(2008)を通じて、知識の問題の解決や、情報技術の進歩に対応する重要な論点を示してきた。第一に、労働党政権は、政府と国民の関係性に加えて、国民と科学、芸術、技術との関係性の変化を企てていた。第二に、英国には、科学革命や産業革命を政府、産業、大学が牽引した事実はなかったが、『創造的な英国』は、当時、このような場所の外に見られた関係を創り出すことを政府、産業、大学に求めた。第三に、『創造的な英国』は、仕事の質中心の新しいヒエラルキー（意識）を創造することによって、若くて新しい、創造的な英国の実現を目指す、政府、産業、大学の全てに関わる政策である。英国における創造的転回は、資本主義、社会主義と民主主義それぞれの論理やイデオロギーの限界や矛盾を超えた社会の実現を目指す動きであった。

本論文では、ブレア政権期以降の英国を事例に、創造的転回について検討する。はじめに、ブレア政権が企てた二つの変化を描写する。次に、科学、芸術、技術に関わる人々、その仕事、その設備を設けてきた政府、産業、大学の変化を通じて、古い産業革命と新しい産業革命の違いについて論じる。最後に、階級（class：社会制度）及びヒエラルキー（hierarchy：意識）をめぐる議論の変容を通じて創造的転回とその理由について検討する。

## 2. 英国における創造的転回

### 2.1 創造的転回

創造的転回とは、知識の問題の解決を前提する、情報技術の進歩への適応のプロセスであり、これまで描写されてきたイノベーションとは異なる、体験されたイノベーション、つまり創造という社会的プロセスの前提である。知識の問題とは、主観性の立場の対立を通じて発見できる、認識と認識における時間の問題であり、言葉やものに内在する経験、意味、合理性、より社会的には倫理と権力の問題である。2000年以降の欧州では、創造的転回を企てる政府、産業、大学も観察できるようになったが、英国は、その目的や理由までをはっきりと示した国の一つであった。ブレア政権期[1997-2007]とブラウン政権期[2007-2010]の英国では、『創造的な英国 *Creative Britain*』というヴィジョン(1998)や戦略(2008)を通じて、知識の問題の解決や、情報技術の進歩に対応する重要な論点を示してきた。

英国における創造的転回は、資本主義、社会主義と民主主義それぞれの論理やイデオロギーの限界や矛盾を超えた社会の実現を目指す動きであった。Schumpeter (1942)は、「社会主義の問題についてのほとんど40年に渡る思索、観察、研究の大部分を読みやすい形にまとめようとした努力の所産」として『資本主義・社会主義・民主主義』を書き<sup>2</sup>、その過程で、『創造的破壊のプロセス』について論じている。つまり、本来、イノベーションは、この三つの考え方の間に生じる現象として観察されたはずであるのに、以後の議論の多くは、この関係性を分断することによって進められ、描写されたイノベーションと体験されたイノベーションとの間にも隔たりが生じた。しかし、トニー・ブレアは次のように語っていた。「社会主義は私にとって、人生の道徳的な目的であり、価値の一式であり、社会、協働、一人では達成できないことを一緒に達成するための一つの信念である」<sup>3</sup>。新しい競争における、「社会主義と民主主義との切ってもきれぬ関係」(Schumpeter 1942)の重要性を指摘していたのである。

ブレア政権に始まる労働党政権は、政府と国民の関係性に加えて、国民と科学、芸術、技術との関係性に変化を企てていた。その目的は、新しい競争に対応することにあった。トニー・ブレア(1996)は、首相になる前、「蒸気機関の発明や、大量生産の発展の方法とは全てにおいて異なる、新しい産業革命の時代に入った」といい、知識を「国際ビジネスの通貨」と表現している。この競争に対応するには、情報技術の進歩への適応の前提、つまり、知識の問題の社会的な解決が必要であった。だから、創造的な人や組織を定義するのではなく、創造という社会的プロセスと、ここに入り込んでいく社会的存在としての人や組織についての思索・観察・研究を始めたのである。

この動きを象徴したのは、「ニューレイバー、ニューブリテン」、そして、『創造的な英国』という二つの言葉である。

## 2.2 “New Labour, New Britain”

ブレア政権が企てた変化の一つは、政府と国民の関係性である。1997年の総選挙で地滑りの勝利を収めた労働党は、いくつかの魅力的なスローガンを掲げていた。最もよく知られているのは、“New Labour, New Britain”<sup>4</sup>という言葉である。英国の場合、“Labour”という単語には、労働党という意味もあり、このフレーズにはまず、過去の労働党との違いをアピールする狙いがあった。労働党は、1979年に政権の座を奪われて以来、18年間も野党の席に座ることを強いられてきた経緯があり、1983年の選挙公約は、「歴史上最も長い遺言」と呼ばれていた<sup>5</sup>。1992年に4回目の敗戦を記録した時、労働党は、もはや政権に返り咲くことが不可能だと考えられた。しかし、トニー・ブレア(2010)は「1983年に初めて議員に選出される前から、労働党の問題は自業自得だと気づいていた」。1997年の総選挙では、保守党を支持してきた人々が共鳴できるようキャンペーンが計画され、労働党がこれまでにない新たな政党であるという印象を与えている<sup>6</sup>。

もちろん、「新しい」という表現には、人々が共有している過去との対比が伴う。たしかに、過去20年間の英国の経験を振り返ると、この間には、様々な新しさを発見することができる。2014年9月にスコットランド独立をめぐる住民投票、2016年にEU離脱の国民投票が行われるなど、英国が歴史的な転換点を迎えていることに疑いはない。スコットランドとイングランドが合同し、グレートブリテン王国が建国されたのは、1707年である。EU離脱が決まった翌日には、1511年にカトリックを離脱し、イングランド国教会を作ったヘンリー八世の肖像画を載せる新聞<sup>7</sup>もあった。このカトリック離脱は、のちにイングランド国教会の設立によって、宗教改革と呼ばれるようになっていく。

しかし、ニューレイバーのいう「新しい英国」は、英国を観察、描写する人にとっての「新しい英国」というよりは、英国という場を構成する人々の見方や考え方の新しさであった。トニー・ブレアも、次のように言っていた。「私の英国についての野望は、ポテンシャルとパフォーマンスの溝によって定義される。私たちは、偉大な過去を持つ国であるものの、しばしば過去に学ぶよりも、過去に生きてしまう。そのマインドセットを変え、変化のマスターになることによって変化の被害者にならないということが英国を若い国にするということである」(Blair 1996)。首相就任前には、近代的な産業政策として、次の三つの政策も掲げていた。第一に、中小企業への新しいベンチャーキャピタルとより包括的なアドバイスの提供、第二に、国内よりも国外での評価が高い科学、イノベーション、デザインの振興、第三に、地域経済の成長を目的とした地域の開発と活性化である(Blair 1996)。一般的に、産業政策は何か特定の技術や資源で語られるが、新しい労働党による、新しい英国を実現するには、あるいは情報技術の進歩に対応した政策には、目に見える事物中心の議論ではなく、人やその集団、彼らの活動や仕事、ライフサイクル中心の議論が必要であった。

### 2.3 『創造的な英国』

ブレア政権が企てたもう一つの変化は、国民と科学、芸術、技術との関係性である。

ニューレイバーが掲げた、新しい労働についての具体的な政策の一つは『創造的な英国』である。このヴィジョンはまず、1998年に文化・メディア・スポーツ省（DCMS）の大臣クリス・スミス卿の著書として出版された。十年後、同じタイトルは、DCMS、大学・イノベーション・スキル省（DIUS）、事業・企業・規制改革省（BERR）が合同で発表した戦略のタイトルにも使われている。二つの『創造的な英国』の内容を要約すると、その目的は、創造的な人を定義したり、選んだりするのではなく、英国が人々の創造性が繁栄する場所になるような仕組みや、その仕組みを補完する人々の働きを強化することにあった。具体的な計画や実施事項は、2005年前後に変容したが、「すべての人が創造的である」という前提は一貫して共有し続けてきた。創造的な人を選択、観察、描写するのではなく、アンリ・ベルクソンの『創造的進化』（1907）と同様、創造という社会的プロセスに関与する社会的存在としての個人や、その集団のための思索と観察を始めたのである。

スミス大臣の『創造的な英国』（1998）は、産業革命期の価値観を回顧させる内容であった。ジョン・ラスキンの『その後のものにも Unto This Last』（1862）の一節（No wealth but life）が引用されているように、産業革命期の価値観といっても、工業化に懸念を示し、活動していた人々のそれである。ラスキンは、たとえば科学革命について論じた C.P.スノー（1959）によって、「いろいろ空想をたくましくしたが、けっきょく、恐怖の叫びをあげたに過ぎなかった」人物として紹介されていた。しかし、そう指摘されたもう一人で、その社会主義的な思想への注目も高い、ウィリアム・モリスが次のように言ったように、『創造的な英国』は、新しい労働についてのヴィジョンでもあった。「（芸術と労働という）重要なテーマについて考えるときには、世界の歴史の過去を振り返ることが不可欠である。というよりは、それが世界の歴史なのである」（Morris 1890, 2004）。

もちろん、ブレア政権が目指していたのは、「新しい英国」である。「われわれは世界中で親しまれているスポーツを生み出した」こと、「我々は最高の文学、芸術、そして詩を世界に与えた」ことを認めた上で、次のようにも言っていた。「我々は、我々の歴史を誇っているが、それは重くのしかかるものである。なぜか？それが国家としてのわれわれを統一するものではなく、隔てるものによって定義しようとしてきたからなのだ」。『創造的な英国』は、「隔てるもの」を好む人々によって、芸術や文化のための政策であると考えられてきた。しかし、この政策が問題化したのは、このような認識であり、目に見える存在によって分断された社会構造である。知識の問題の解決を前提する『創造的な英国』には、当初から、「デザインや科学、医学、エンジニアリングにまで及ぶ、芸術とメディアといった中核的な領域をはるかに上回る願望があった」（Bakhshi, Hargreaves, Mateos-Garcia 2013）。

### 3. 『創造的な英国』における新しい労働

#### 3.1 『創造的な英国』と科学・芸術・技術

『創造的な英国』は、科学、芸術、技術に関与する人と、その仕事、その設備を設けてきた政府、産業、大学にも情報技術の進歩への適応を求めてきた。

工業化とその進行は、かつて貴族の趣味や、彼らに保護されていた科学、芸術、技術に変化を与えた。「法律の熟練者、医療の開業者、聖職者などは文書学問の性格から手工業徒弟とは異なる資格として学ばれ、大学の博士など学位課程で形式化されたのである」(Buchanan 2006)。シビルエンジニア協会が設立された時(1818年)の演説では、次のような発言もあった。「技術者は、科学者 philosopher と働く機械工 mechanic との間の仲介者で、外国人との間の通訳と同じように、両方の言葉を理解しなければならない。したがって、実際的知識と理論的知識の両方を持つことが絶対不可欠である」(広瀬 2012)。英国の場合、1861年の国勢調査以降、教師と教授、俳優、文筆家、編集者、ジャーナリスト、芸術家と彫刻家、音楽家とオルガニスト、シビルエンジニアと建築家は、プロフェッションの地位を得た(Reader 1966、村岡 1980)。

しかし、産業革命期に設計された制度は、1990年代までの間に、限界や矛盾を露呈し始めていた。例えば、1986年には、1500人の科学者たちが Save British Scientist というキャンペーンを行い、基礎研究の重要性を訴えた。このキャンペーンを組織した団体は、新聞広告を使って、「ラジオ、テレビ、プラスチック、コンピューター、ペニシリン、X線、トランジスタやマイクロスコプ、レーザー、原子力、ボディスキャナー、遺伝子コードなど」基礎研究の成果とともに、「手遅れになる前に、英国の科学を守るため」の協力を広く呼びかけた<sup>8</sup>。この後、サッチャー政権も、メージャー政権も、当時の科学者や芸術家たちが抱えていた問題の解決を図るべく動いていたが、2007年にネイチャー誌に掲載されたあるエッセイ<sup>9</sup>によれば、英国科学の黄金期はブレア政権期にあった。

ブレア政権が問題化したのは、近代が「我が肉体による労働と我が手の仕事」<sup>10</sup>を区別する理論をほとんど生み出さなかったこと(Arendt 1958)である。科学者たちが直面していたのは、必ずしも彼ら、芸術、技術に関与する人々やその仕事だけに関わる問題ではなかった。問題は、「真面目な活動力は、それが生み出す成果に関わりなく労働と呼ばれ、必ずしも個人の生命や社会の生命のためではない活動力は全て遊びという言葉のもとに一喝されている」ことにあった。Florida (2002)は、「科学、エンジニアリングから建築、デザイン、更には芸術、音楽、エンターテインメントから法律、ビジネス、金融、ヘルスケアとその関連事業に従事している人々」を「クリエイティブクラス」と呼んでいる。しかし、より重要なのは、なぜ新しい職業ではなく、新産業であるとも限らず、起業するとも限らない彼らが今日、新しい経済主体として期待されているのか、という問いにある。

### 3.2 科学革命と産業革命における政府・産業・大学

英国には、科学革命や産業革命を政府、産業、大学が牽引した事実はなかった。「新しい道路、橋、運河、鉄道を作った人たちは国家ではなく、個人や企業の民間人であった」(Ashton 1948)。それから「科学革命の歴史は、ほとんど完全に大学の外部にあった」(Ashby 1958)。「アカデミックな人びとは産業革命とはなんの関係もなかった」し、「ほとんどいたるところで、知識人たちは何が起こりつつあるかを理解しなかった」(Snow 1959)。「18世紀の後半にはヨーロッパの事実上すべての政府が工業化を望んでいたが、英国だけが成功した。逆に、英国政府は1660年以来利潤追求を最優先する政策にしっかりと専念していたのだが、産業革命はその一世紀以上のちまでおこらなかったのである」(Hobsbawm 1968)。政府、産業、大学は、しばしば人格化されて語られるものの、「近代科学の設備を設けた場所」(Gillispie 2006)に過ぎないのである。

もちろん、政府や産業、大学は、多くの人々の、ある期間には、いくつかの経験、機会を提供してきたとは言える。ジェームス・ワット[1736-1819]も、蒸気機関の実用化に成功する前には、グラスゴー大学で働いていた。しかし、より重要な事実は、スコットランド経済の悪化や妻の死をきっかけに、ワットがバーミンガムに移動したこと、この地でマシュー・ボルトン[1728-1809]らに出会ったことである。Ashton (1948)は、産業革命期における国立技術協会(National Society of Arts)や、マンチェスターの文学哲学協会、それからバーミンガムのルナーソサエティの働きの重要性を強調するが、ワットとボルトンは、ルナーソサエティのメンバーでもあった。このコミュニティの発起人はチャールズ・ダーウィンの祖父、エラスムス・ダーウィン[1731-1802]である。もう一人の祖父、ジョサイア・ウェッジウッド[1730-1795]もまた、メンバーの一人であり、ウェッジウッド社の創業者でもある。

科学革命や産業革命の中心人物として語られてきた人々の多くは、産業革命発祥の地と呼ばれるマンチェスターから120kmほど離れたバーミンガムに集っていた。ルナーソサエティには、「酸素の発見者を名乗る有資格者」(Kuhn 1962)三人のうち二人、ジョゼフ・プリーストリーとアントワーヌ・ラボワジェも参加していた。Mantoux(1906)は、ボルトンやウェッジウッドなど当時の製造業者のうち、「金持ち貴紳階級の中で少数精鋭の知識階級を構成していた」人々を例に、次のようにいう。「もっとも興味深いことは、彼らの商業活動そのものが、当時の科学や芸術の動向と絡み合っていたことである。技術の問題は、初めは単純に具体的な観点から提起されていたが、18世紀の末ごろになると、準理論的な科学研究と接触を持つようになった。…彼らにとって、工業は単なる致富の手段ではなくなった」。

新しい産業革命において、『創造的な英国』が政府、産業、大学に求めたのは、このような場所として機能することや、その促進を進めることであった。

### 3.3 知識の普及と知識の創造

『創造的な英国』は、知識の問題の解決の先にあるヴィジョンであり、戦略である。つまり、知識の創造と知識の普及のプロセスの違いや、「体験された知識」と「描写された知識」の区別を前提している。

欧州が「知識経済」という言葉を多用する前から、知識は常に重要な資源であった。英国では、何世紀も前に、フランシス・ベーコン[1561-1626]が Knowledge is power (知は力なり) という言葉を残していたように、今日、ロンドンに行けば、「知識の改善運動」<sup>11</sup>と呼ばれた啓蒙の時代と産業革命の因果も明示されている。ここに展示されている、1823年に発行された『メカニクス・マガジン』<sup>12</sup>の表紙にも、Knowledge is power と書かれている。しかしながら、この時代に、知識が力であった理由は、知識の普及が労働力に直結し、彼らが技術の普及に重要な役割を果たしたからである。たしかにジェームス・ワットとマシュー・ボルトンらは、蒸気機関の実用化に成功したが、その普及には、彼らの知識が移転された人々とその労働力が不可欠であった。

英国の産業革命は、「史上最初のもの」であったから、その後のすべての産業革命といくつか重要な点が異なっていた。「その後の革命はイギリスの経験や事例や資力を利用することができた。イギリスは他の国々のこういうものを、きわめて限られた、わずかな程度でしか利用できなかった」(Hobsbawm 1968)。当時の英国には、エンジニアリングについての十分な知識もなかった。フランスの人々が理論的思索に動機付けられていたのに対して、イングランドの人々は実践を重視していた (Nicoladis & Chatzis 2000)。工学設計に関する実践的かつ科学的な知識を文書化する動きも、1820年にトレゴールドという人物が書いた *"Elementary Principles of Carpentry"* を待った (Stephens & McDowall 2015)。有用知識普及協会<sup>13</sup>の発足も 1826 年である。

しかし、古い産業革命と違って、新しい産業革命が求めるのは、知識の普及ではなく、知識の創造である。いかにして知識を普及させるかという競争から、いかにして普及する知識を創造できるか、という競争へとシフトしているのである。今日、私たちは産業革命の中心人物としてジェームス・ワットの名前を知っている。しかし、1819年に彼が他界した時、英国の人々は、ナポレオンに勝利したネルソン提督やウェリントン公爵に夢中であり、ワットの工房も、その死後には「鍵をかけられ、放置されていた」<sup>14</sup>。長く、天才と呼ばれ、偉大な発明家と言われてきたような人々の思索や観察のプロセスも、解明されてこなかった。英語圏の場合、その要因の一つは、ギリシャ語やラテン語、フランス語やドイツ語と違って、「描写された知識」と「体験された知識」を区別する言葉がなかったこともあげられる。知識を創造するプロセスについての議論も、英国ではなく、ドイツ語圏やフランス語圏の芸術や文化に関連する議論として進んだ<sup>15</sup>。

## 4. 『創造的な英国』の「新しい労働」

### 4.1 知識経済と第三の道

『創造的な英国』は、仕事の質中心の新しいヒエラルキー（イメージ）を創造することによって、若くて新しい、創造的な英国の実現を目指す、政府、産業、大学の全てに関わる政策である。近代は、労働を優位に立たせ、仕事や活動が人間的意味を失っていくプロセスであった（Arendt 1958）。創造的転回は、この仕事や活動の意味の回復を通じて、人々が競争に淘汰されないアイデアや、質の高い知識を創造する場所を創り出すプロセスである。古い産業革命における蒸気機関も、新しい産業革命における情報技術も、「人間関係を一変させた。新しい考え方が現れた。新しい感情が開花しようとしている」(Bergson 1907)。しかし、情報技術の進歩は、特に、科学、芸術、技術に関与する人々と、その仕事、その設備を設けてきた政府、産業、大学に変化を求めてきた。

1990年代以降は、政治経済分野においても、創造的転回の必要性を示唆する議論が増えている。例えば、政治学者ジョゼフ・ナイのいうスマートパワー、つまり、「ハードパワーとソフトパワーを組み合わせて様々な状況に合わせて効果的な戦略を構築する能力」である。ナイは、『不滅の大国アメリカ』（1990）において、力の変化を説明し、ソフトパワーの重要性を指摘して、『ソフトパワー』（2004）では、最終的に次のように言っている。（米国が成功を収めるには）「ソフトパワーの役割をもっと深く理解し、外交政策でハードパワーとソフトパワーのバランスを改善しなければならない。そうすれば、スマートパワーになれる。米国は以前にそうしてきた。もう一度同じことができるはずである」。しかし、このように観察、描写された知識に対して、実現あるいは再現可能なそれには、ハードとソフトあるいは、「主観と客観の完全な分離」を前提する議論の限界や矛盾を超えていくプロセスが必要である。

創造的転回は、英国の社会学者アンソニー・ギデンズ（1998, 2000）のいう「第三の道」を切り開く、より実践的なプロセスの結果として生じる現象である。「第三の道」という言葉は、それ以前から多様に使われていたが、ブレア政権のいう「第三の道の政治が目指すところを一言で要約すれば、グローバリゼーション、個人生活の変貌、自然と人間との関わり等々、私たちが直面する大きな変化の中で、市民一人ひとりが自ら道を切り開いてゆく営みを支援すること」である。その「権利は必ず責任を伴う」「民主主義無くして権威なし」という二つの原則からわかるように、創造的転回が要請するのは、個人か集団かではなく、個人と集団の関係性中心の議論へと進むことである。ギデンズは次のようにもいう。「第三の道の核心的なテーマである国家と政府の改革は、知識経済として特徴づけられる経済の変容と密接に結びついている」。この動きは、政府にも変化を求めているのであって、ブレア政権は、その変化に対応できる政府を実現しようとしていたのである。

## 4.2 階級とヒエラルキー

第三の道の議論の中心は、社会科学と人文学という分断によって見過ごされてきたことであり、このことを説明する最適なテーマの一つは階級<sup>16</sup>である。Cannadine (1998)は、階級をめぐる三つの視点を次のように分類した。第一の視点は、社会を継ぎ目のない網の目状と見るヒエラルキーモデル、自分たちが誰なのか、いかなる種類の社会に属しているのか、その社会の中で自分たちはどこにいるのか、常に考えている英国(民)の心のうちに描かれたイメージである。第二の視点は、上中下の集合体から成る三層モデルで、第三の視点は、「我々と奴ら」に分裂した社会と見る二分法的で敵対的な二極モデルである。二極モデルと三層モデルは、「人々が社会をみて理解するもう一つの方法を探し求める際の自己意識的な表現の産物」だという。階級研究は、マルクスに代表される二極モデルに始まり、その批判として三層モデルが現れたのちに、ヒエラルキーモデルが登場した。

階級をめぐる研究の変遷は、ある特定の人々、当時、その場の状態を直接観察していた人々<sup>17</sup>によって描写された知識が再構築されていくプロセスであった。Cannadine (1998)は次のように言う。「英国近代史の解釈は、詳細な実証研究だけでなく、「マルクス主義的方法で書かれた社会史のテキストには女性が全く出てこない」ことを主張した人々によって弱体化した。加えて、ポストモダンの文学理論により、彼らの「言語論的転回」と呼ばれるものの発見の結果、多くの歴史家は、階級を土地、資本、労働間の厄介な関係や政治闘争の研究とはみなさなくなり、階級は人々が使用した言語の研究と見なされるようになった」。Thompson (1961)は、『イングランドにおける労働者階級の形成』で、階級を「人間関係に実際に生じるなものか」、「経験という未加工の素材並びに意識の双方における、異質で一見したところ関連のない、多くの出来事を統合する一つの歴史的現象」として扱っている。

長い間、階級は生まれや職業に依存していた<sup>18</sup>。しかし、『創造的な英国』の目的は、生まれや職業ではなく、人々の仕事の質中心のヒエラルキーを創り出そうとした政策である。階級とヒエラルキーという言葉は混同されることが少なくないが、前者は社会制度であり、後者は(本来は)人々の内なるイメージで、Schumpeter (1912)のいう階級<sup>19</sup>にも近い意味を持っている。英国の外には、Bergson (1907, 1934)や Tilgher (1924)、Arendt (1958)など、人間の本質としての「つくる」という行為や、「創造」という社会的プロセスについての議論を行ってきた人々がいた。ベルクソンは、人々を「ホモ・サピエンス」(知る人)、「ホモ・ファーベル」(つくる人)、「ホモ・ロカクス」(しゃべる人)に、アーレントは、人々の活動的生活を、労働と仕事、活動に分類<sup>20</sup>することによって、新しいヒエラルキーについての論点を提示してきた。『創造的な英国』は、二人の議論の中心にあったホモ・ファーベルと呼ばれるような存在とその仕事を「クリエイティブ産業」と呼んでいる。

### 4.3 新しいヒエラルキーと新しい労働

『創造的な英国』は、仕事の質中心の、新しいヒエラルキーの創造を通じた「新しい英国」に向けたヴィジョンであり、戦略である。教授や芸術家など、名前がついた職業や、Florida (2002)のいう「クリエイティブクラス」に属する人々の間にも、レベルや質という言葉で区別される無意識の序列はある。実際に、競争に生き残ることができる人ばかりではない。『創造的な英国』が形式化しようとしてきたのは、このまだ数値には表されていないような基準であった。その背景には、科学、芸術、技術に関与した、偉大な発明家や優れた業績を残したような人々を評価できなかった反省もあった。エンジニアは、過去二世紀に渡って英国社会に多大かつ顕著に貢献したが、サミュエル・スマイルズがその『エンジニアの生活』<sup>21</sup>の題材に選んだような一部の著名なエンジニアを除いて、歴史家たちからさえもほとんど注目されてこなかった(Buchanan 1989)。スマイルズが尊敬していた、トマス・カーライル(1843)のいう「キャプテンオブインダストリー」にも、エンジニアは誰一人選ばれていない。

しかし、英国は経験としては、いかにして新しいヒエラルキーが創造できるかということも、偉大な人々の功績を讃えることだけが『創造的な英国』を実現する手段ではないことも知っていた。その方法とは、計量 measuring とマッピング mapping である。ロンドンにある科学博物館の展示によると、啓蒙の時代の最も重要な功績はこの二つの方法の開発にあった。海外貿易では、より正確な天文表と海上で経度を知る方法が、軍事的には新しい植民地を地図に表す方法が求められ、さらに、より良いスタンダードが開発されていった。時が経ち 1990 年代の英国には、それまでのように自然資源や技術、機械ではなく、人が生み出す価値や、彼らの働き方のスタンダードが必要になっていた。『創造的な英国』は、その観察や描写が可能な分野を「クリエイティブ産業」と呼び、人工知能やロボット、その他デジタル技術が進歩、普及した時代の労働についての思索を始めたのである。

その目的は、これまで天才や偉人と呼ばれてきたような人々、例えば、コンピューター・サイエンスの父と呼ばれるアラン・チューリングのような人と、その仕事に感謝できる社会を実現することにもあった。実際に、2009 年には、ゴードン・ブラウン（当時、首相）が過去に政府が彼に対して行ったことを公式に謝罪している<sup>22</sup>。1990 年代半ば以降、インターネットが急速に普及し、人工知能やロボットの開発が進み、肉体労働に続いて知的労働の機械化が急速に進んでいる。ブレア政権発足が発足した 1997 年は、IBM のディーブ・ブルーが初めてチェスの世界王者に勝利した年でもあった。今日までの間に、言語化された知識が普及するプロセスはますます変容し、将来的な働き方の変化を予測する研究成果も多数発表されている (Brynjolfsson & McAfee 2011, 2014 Frey & Osborne 2013, Bakhshi, Frey & Osborn 2015)。『創造的な英国』は、この新しい競争に淘汰されないことだけではなく、競争に淘汰されないアイデアを創出する人々とその仕事中心の政策である。

## 5. 考察

本論文では、英国における創造的転回について検討した。創造的転回とは、知識の問題の解決を前提する、情報技術の進歩への適応のプロセスであり、これまで描写されてきたイノベーションとは異なる、体験されたイノベーション、つまり、創造という社会的プロセスの前提である。英国の労働党政権は、『創造的な英国 *Creative Britain*』というヴィジョンや戦略を通じて、知識の問題の社会的解決による情報技術の進歩への対応を進めてきた。

第一に、労働党政権は、政府と国民の関係性に加えて、国民と科学、芸術、技術との関係性の変化を企てていた。1997年に発足したブレア政権は、*New Labour, New Britain* という約束の元に、保守党と労働党の方針を超えた政策を示した。その具体的なヴィジョンや戦略の一つとして掲げられたのが『創造的な英国』である。知識と情報の時代の競争で生き残るには、情報技術の進歩への適応、その前提である、知識の問題の社会的な解決が必要であった。だから、英国は、創造的な人や組織を定義し、選択するのではなく、創造という社会的プロセスと、ここに入り込んでいく社会的存在としての人や組織についての思索・観察・研究を始めたのである。

第二に、英国には、科学革命や産業革命を、政府、産業、大学が牽引した事実はなかったが、『創造的な英国』は、当時、このような場所の外に見られた関係を創り出すことを政府、産業、大学に求めた。『創造的な英国』は、科学、芸術、技術に関与する人と、その仕事、その設備を設けてきた政府、産業、大学にも情報技術の進歩への適応を求めてきた。古い産業革命（及び科学革命）と新しい産業革命の違いは、政府、産業、大学に、バーミンガムのルナーソサエティのような場所を提供し、機能させることにある。知識は、19世紀にも重要な資源であったが、ブレア政権が求めたのは、このような技術の普及に不可欠だった、労働力としての知識ではなく、知識を創造し、表現する人と、その仕事であった。

第三に、『創造的な英国』は、仕事の質中心の新しいヒエラルキー（意識）を創造することによって、若くて新しい、創造的な英国の実現を目指す、政府、産業、大学の全てに関わる政策である。近代は、知識の普及によって、労働を優位に立たせ、仕事や活動が人間的意味を失っていくプロセスであった。その要因は、ベルクソン(1907)のいう「ホモ・ファール」という存在や、アーレント(1958)のいう「仕事」についての議論がほとんど行われてこなかったことにあった。しかし、1990年代になると、それまでのように自然資源や技術、機械ではなく、人が生み出す価値や、その働き方のスタンダードが必要になっていた。英国は、その観察や描写が可能な分野を「クリエイティブ産業」と呼び、人工知能やロボット、その他デジタル技術が進歩、普及した時代の創造的労働についての思索・観察・研究を始めたのである。英国における創造的転回は、資本主義、社会主義と民主主義それぞれの論理やイデオロギーの限界や矛盾を超えた社会の実現を目指す動きであった。

## 6. 終わりに

本論文では、英国における創造的転回について検討した。近年、日本でも「働き方改革」が進められているが、『創造的な英国』は情報技術の進歩に対応した働き方改革とも呼べるヴィジョンであり、戦略である。この政策は、芸術や文化に関わる政策だと思われがちであるものの、知識と情報の時代の競争に淘汰されないアイデアや、質の高い知識を創造する人や、その集団とその仕事、その設備を設けてきた場所についての計画である。肉体労働に続いて機械化が進む知的労働の先にある「創造的な労働」を扱っているのである。次なる課題は、『創造的な英国』に関与した政府、産業、大学における創造的転回について検討することである。

## 参考文献

- Arendt, H. (1958) . The Human Condition. Chicago, IL, USA. University of Chicago Press. (志水速雄訳『人間の条件』筑摩書房、1994年) .
- Arvidsson, A., and Peitersen, N. (2016). The Ethical Economy: Rebuilding Value After the Crisis. New York, NY, USA. Columbia University Press.
- Ashby, E. (1958). Technology and the Academics: An Essay on Universities and the Scientific Revolution. London, UK. Macmillan. (島田雄次郎訳、『科学革命と大学』玉川大学出版部、1995年) .
- Ashton, T. S. (1948) The Industrial Revolution, 1760-1830. London, UK. Home University Library. (中川敬一郎訳『産業革命』岩波文庫、1953年) .
- Bakhshi, H., Frey, C., Osborne, M. (2015). Creativity Vs Robots: The Creative Economy and the future of employment. London, UK. Nesta.
- Bakhshi, H., Hargreaves, I., Mateos-Garcia, J. (2013). A Manifesto for the Creative Economy. London, UK. Nesta.
- Benjamin, W. (1936). Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit. (浅井健二郎・久保哲司訳、『ベンヤミンコレクション1 近代の意味』筑摩書房、1995年) .
- Bergson, H. (1934, 1969). La Pensée et le mouvant, essais et conferences. Paris, France. Presses Universitaires de France. (河野与一訳、『意識と動くもの』岩波書店、1998年) .
- Bergson, H. (1907, 2007). L'Évolution créatrice. Paris, France. Les Presses Universitaires de France. (合田正人・松井久訳『創造的進化』筑摩書房、2010年) .

- Blair, T. (1996). *New Britain: My vision of a young country*. London, UK. Fourth Estate.
- Blair, T. (2010). *A journey*. Hutchinson, UK. Random House. (石塚雅彦訳、『ブレア回顧録 上・下』日本経済新聞社、2011年) .
- Blake-Roberts, G. (2014). *Wedgwood: The illustrated history of an iconic name in pottery*. Stamford, UK. Key Publishing.
- Boix, R., Lazzarretti, L., Capone, F., De Propriis, L., and Sanchez, D. (2013). The geography of creative industries in Europe. Comparing France, Great Britain, Italy and Spain. In *Creative Industries and Innovation in Europe: Regions and Cities*, edited by Luciana Lazzarretti. Oxon, UK. Routledge.
- Botsman, R. and Rogers, R. (2010) ‘What’s Mine Is Yours: How Collaborative Consumption is Changing the Way We Live.’ New York, NY, USA. Harper Collins.
- Briggs, A. (1955, 1970, 1972). *Victorian People: A reassessment of persons & themes 1851-1867*. Chicago, IL, USA. The University of Chicago Press. (村岡健次・河村貞枝『ヴィクトリア朝の人びと』ミネルヴァ書房、1995年)。
- Brown, G. (2017). *My life, Out times*. London, UK. The bodley head.
- Brynjolfsson, E. and McAfee, A. (2011). *Race Against the Machine: How the Digital Revolution is Accelerating Innovation, Driving Productivity, and Irreversibly Transforming Employment and the Economy*. Lexington, MA, USA. Digital Frontier Press.
- Brynjolfsson, E. and McAfee, A. (2014). *The Second Machine Age: Work, Progress, and Prosperity in a Time of Brilliant Technologies*, New York, NY, USA. W.W. Norton & Company.
- Buchanan, R. A. (1989). *The Engineers: A history of the Engineering Profession in Britain 1750-1914*. London, UK. Jessica Kingsley Publisher.
- Buchanan, R. A. (2001). *Brunel: The Life and Times of Isambard Kingdom Brunel*. London, UK. Hambledon Continuum.
- Cannadine, D. (1988). *Class in Britain*, New Haven, CT, USA. Yale University Press. (平田雅博、吉田正広『イギリスの階級社会』日本経済評論社、2008年)。
- Cannadine, D. (1991). *The pleasures of the Past: Reflections in Modern British History*. London: UK. W. W. Norton & Company.
- Carlyle, T. (1843). *Past and Present*. (上田和夫訳『カーライル選集 III 過去と現在』日本教文社、1962年) .

- Charlton, T. M. (1976). Theoretical Work in The Woks of Isambard Kingdom Brunel edited by Pugsley, A. Bristol, UK. Institution of civil engineers, University of Bristol.
- DCMS, DIUS, BERR. (2008). Creative Britain: New Talents for the New Economy. London, UK. Department for Culture, Media and Sport, Department for Innovation, Universities and Skills, and Department for Business, Enterprise and Regulatory Reform.
- Engels, F. (1845). Die Lage der arbeitenden Klasse in England. Nach eigener Anschauung und authentischen Quellen von Friedrich Engels, Leipzig, Deutschland. Verlag von Otto Wigand. (浜林正夫訳『イギリスにおける労働社会級の状態上・下』新日本出版社、2000年) .
- European Commission. (2016). Communication from the Commission to the European Parliament, the Council, the European Economic and Social Committee and the Committee of the Regions: A European agenda for the collaborative economy. Brussels, Belgium. European Commission.
- Faulkner, P. (2013). Fifty years of Morris Studies: a personal view. London, UK. William Morris Society.
- Florida, R. (2002). The Rise of the Creative Class: And How It's Transforming Work, Leisure, Community, and Everyday Life. New York, NY, USA. Basic Books.
- Florida, R. (2008). Who's your city? How the Creative Economy Is Making Where to Live the Most Important Decision of Your Life. New York, NY, USA. Basic Books.
- Frey, C. B. and Osborne, M. (2013), The Future of Employment: How Susceptible Are Jobs to Computerisation? Technological Forecasting and Social Change, 2017, vol. 114, issue C, 254-280.
- Garlick, K. (1966). An exhibition to commemorate the bicentenary of the Lunar society of Birmingham, Birmingham Museum and Art Gallery, October 13th to November 27<sup>th</sup> 1966, Birmingham, Birmingham Museum & Art Gallery.
- Gaskell, E. (1848). Mary Barton. London, UK. Chapman & Hall. (日本ギヤスケル協会監修『ギヤスケル全集2 メアリ・バートン』大阪教育図書株式会社、2001年)。
- Giddens, A. (1998). The Third Way: The Renewal of Social Democracy. Cambridge, UK. Polity Press. (佐和隆光訳『第三の道—効率と公正の新たな同盟』日本経済新聞社、1999年) .
- Giddens, A. (2000). The third way and its critics, Cambridge, UK. Polity Press. (今枝法之・干川剛史訳、『第三の道とその批判』晃洋書房、2003年) .

- Gillispie, C.C. (2007). *Essays and reviews in history and history of science* (島尾永康訳『科学というプロフェッションの出現：ギリスピー科学史論選』みすず書房、2010年).
- Gottlieb, A. (2016). *The Dream of Enlightenment: The Rise of Modern Philosophy*. London, UK. Penguin Books.
- Hawkins, J. (2001). *Creative Economy: How people make money from ideas*, London, UK. Penguin Books.
- Hewison, R. (2014). *Cultural Capital: The Rise and Fall of Creative Britain*. London, Verso.
- Hirshman, A. (1970). *Exit, Voice, and Loyalty: Response to Decline in Firms, Organizations, and States*. Cambridge, USA. Harvard University Press. (矢野修一訳、『離脱・発言・忠誠：企業・組織・国家における衰退への反応』ミネルヴァ書房、2005年) .
- Hobsbawm, E. (1968). *Industry and Empire*. London, UK. Penguin Books. (浜林正夫・神武庸四郎・和田一夫訳『産業と帝国』未来社、1884年)。
- Kuhn, T. (1962). *The Structure of Scientific Revolutions*. Chicago, IL, USA. The University of Chicago Press. (中山茂訳、『科学革命の構造』みすず書房、1971年) .
- Locke, J. (1690). *Two Treatises of government*. (加藤節訳『統治二論』岩波書店、2007年) .
- Lucas, C. (2012). *William Morris in the Twenty-first century*. London, UK. The William Morris Society.
- Mantoux. P. (1906, 1859). *La révolution industrielle au XVIIIe siècle essai sur les commencements de la grande industrie moderne en Angleterre*. Paris, France. Editions Genin. (徳増栄太郎・井上幸治・遠藤輝明訳『産業革命』東洋経済新報社、1964年) .
- Martynenko-Hunt, N. (2017). *William Morris: The Man and his Influence, a paper by John Henry Dearle read at the Design club on April 20, 1910*. London, UK. William Morris Society.
- Morris, W. (1888, 2008). *Useful Works v. Useless Toil*. London, UK. Penguin Books.
- Morris, W. (1890, 2004). *The Relations of Art to Labour*. London, UK. William Morris Society.
- Nicoladis, E. Chatis, K. (2000). *Technological traditions and national identities. Science, technology and the 19<sup>th</sup> century state*. Athens, Greek. Institut de recherches nohelleniques.

- Nye, J. (1990). *Bound to Lead: The Changing Nature of American Power*. New York, NY, USA. Basic Book. (久保伸太郎訳『不滅の大国アメリカ』読売新聞社、1990年) .
- Nye, J. (2004) *Soft Power: The Means to Success in World Politics*. New York, NY, USA. Perseus Books Group. (山岡洋一訳、『ソフト・パワー:21世紀国際政治を制する見えざる力』(日本経済新聞社、2004年)
- Nye, J. (2011). *The future of power*. New York, NY, USA. Public Affairs. (山岡洋一・藤島京子訳『スマート・パワー:21世紀を支配する新しい力』(日本経済新聞出版社、2011年)。
- Ogden, C. K., Richards, I. A. (1923). *The Meaning of Meaning*.8th Ed. New York, NY, USA. Harcourt, Brace & World, Inc.
- O' Brien, P, K. (1988-1998). *Imperialism and the Industrialization of Britain and Europe, 1415-1974*. Oxford, UK. Oxford University Press. (秋田茂・玉木俊明訳『帝国主義と工業化 1415-1974年』ミネルヴァ書房、2000年)。
- Reader, W. J. (1966). *Professional Men: The Rise of the Professional Classes in Nineteenth-Century England*. London, UK. Weidenfeld & Nicolson
- Rondelet, J. (1817). *Traite theorique et pratique de l'art de batir*. 1<sup>st</sup> ed. Paris, France. De Fain.
- Ruskin, J. (1862) *Unto this last*. (西本正美訳『この語の者にも:経済の第一原理について』岩波書店、1928年) .
- Russel, B. A. W. (1911). *Knowledge by acquaintance and knowledge by description*. Proceedings, Proceedings of the Aristotelian Society, 1910-1911.
- Russel, B. A. W. (1986). *Mysticism and logic: including A Free man's worship: Bertrand Russell; with a new introduction by John G. Slater*. London, UK. Routledge.
- Schumpeter, J, A. (1912) *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, Leipzig, Deutschland. Duncker & Humblot. (塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳『経済発展の理論:企業者利潤・資本・信用・利子および景気の回転に関する一研究 上』岩波文庫、1997年)。
- Schumpeter, J. A. (1942, 1947, 1950). *Capitalism, Socialism and Democracy*. (大野一訳「創造的破壊のプロセス」『資本主義、社会主義、民主主義 I/II』日経 BP 社、2016年および、中山伊知郎・東畑精一訳『資本主義・社会主義・民主主義』東洋経済新報社、1995年) .
- Smith, C. (1998) *Creative Britain*, London, UK. Faber & Faber.

- ・ Snow, C.P. (1959) *The Two Cultures and Scientific Revolution*. Cambridge, UK. Cambridge University Press. (松井卷之助訳『二つの文化と科学革命』みすず書房、1984年)
- ・ Stephens, B. and McDowall, J. (2015). *What was Brunel Thinking?* Department of Civil Engineering, University of Bristol.
- ・ Stokes, K., Clarence, E., Anderson, L., Rinne, A. (2014). *Making Sense of the UK Collaborative Economy*. London, UK. Nesta, Collaborative Lab.
- ・ Thatcher, M. (1993). *Margaret Thatcher: The Downing Street Years*. 都市, UK. HarperCollins. (石塚雅彦訳『サッチャー回顧録：ダウニング街の日々』[普及版]上・下、日本経済新聞社、1996年)。
- ・ Thompson, E. P. (1963, 1968, 1980). *The Making of the English Working Class*. Hamondsworth, UK. Penguin Books. (市橋秀夫・芳賀健一訳「イングランド労働者階級の形成」青弓社、2003年)。
- ・ Tilgher, A. (1924). *Storia del concetto di lavoro nella civiltà occidentale*. Rome, Italy. (小原耕一・村上桂子『ホモ・ファーベール—西欧文明における労働観の歴史』社会評論社、2009年)。
- ・ Tregold, T. (1820). *Elementary Principles of Carpentry*. 1<sup>st</sup> ed. London, UK. John Weale.
- ・ 木村めぐみ (2017a) 「表現する組織：創造的進化と創造的転回」一橋大学イノベーション研究センターWP#17-7.
- ・ 木村めぐみ (2017b) 「創造的転回：知識についての知識の改善運動とその変遷」一橋大学イノベーション研究センターWP#17-8
- ・ パーキン、H.J. (1998) 『イギリス高等教育と専門職社会』有本章、安原義仁編訳、多摩川大学出版部。
- ・ 広瀬信(2012)『イギリス技術者養成史の研究：技術者養成期から第2次世界大戦まで』風間書房。
- ・ 村岡健次(1980)『ヴィクトリア時代の政治と社会』ミネルヴァ書房。
- ・ 村岡健次・川北稔編 (1986) 『イギリス近代史：宗教改革から現代まで 改訂版』ミネルヴァ書房。

注.

<sup>1</sup> 「描写された知識 knowledge by description」と「体験された知識 knowledge by acquaintance」は、パートランド・ラッセル[1872-1970]の議論に代表される、ギリシャ語やラテン語、フランス語やドイツ語にあって、英語にはなかった二つのタイプの知識を表す言葉である。前者は「直接的な経験よりも、情報やファクトを通じて蓄積される人、物や知覚についての知識」を、後者は「直接的な経験によって蓄積された人、物、知覚についての知識」を意味している。オックスフォード英語辞典オンライン版 (<http://www.oed.com>) を参照 (2018年2月15日最終アクセス)。

<sup>2</sup> 第一部 (マルクス学説) では、「マルクス主義者ではない」シュンペーターが「マルクスの託宣のユニークな重要性」について非マルクス主義者たるものがいっている確信を裏付けるために、マルクス学説を専門的でない仕方でも要約している。第二部 (資本主義は生き延びうるか) では、「資本主義社会の不可避免的な解体に続いて、社会主義的な社会形態がこれまた不可避免的に出現することを示そうとした」。「いまでは保守的な人々の間ですら一般的な見解として急速に広まっているこのことを立証する」ため、「労多くして複雑な分析」を必要と考えた。シュンペーターのいう社会主義社会とは、生産手段に対する支配、又は生産自体に対する支配が中央当局に委ねられている社会である。第三部 (社会主義は作用しうるか) では、「社会主義秩序が経済的に成功すると期待されるためにはいかなる諸条件が必要であるか、についての諸問題を展望」している。第四部 (社会主義と民主主義) では、「アメリカで近時続けられている論争」に対する一つの寄与であり、マルクスの議論である「社会主義と民主主義との切っても切れぬ関係を遺憾無く証明するに足ると自ら信ずる一つの理論」から議論を始めている。

<sup>3</sup> マンチェスターPeople's museum で開催されていた展示 “New Dawn? The 1997 General Election” (2017年3月25日から6月4日) による。

<sup>4</sup> 1997年の総選挙用ポスター等には、この他にも、次のような表現のバリエーションがあった。“New Labour, New Start,” “New Labour, New Care,” “New Labour, New Security,” “New Labour, New Prosperity.”

<sup>5</sup> マンチェスターPeople's museum で開催されていた展示 New Dawn? The 1997 General Election (2017年3月25日から6月4日) による。

<sup>6</sup> ブレアもまた、「メディア対策に最適なものを選ぶことはなによりもこだわった」と述べているし、「確かに反発はあったが、抑えることが可能だったし、効果は絶大だった」(Blair 2010) と振り返っている。

<sup>7</sup> 具体的には、2016年6月25日火曜日のフィナンシャル・タイムズ9ページに掲載された記事 “Tudor Brexit: Today's tussle with Brussels echoes 1534 when Henry VIII split with Rome” の紹介である。

<sup>8</sup> 全文は、以下の通りである。「基礎研究は、ラジオやテレビ、プラスチック、コンピュータ、ペニシリン、X線、トランジスタとマイクロチップ、レーザー、原子力、ボディスキャナ、遺伝コードなどを私たちに与えてくれました…。すべての現代技術は、世界の仕組み、それが何であるか、どのような力がその行動を形成するかを理解しようとする科学者の発見に基づいています。基本研究は、生命の秘密を明らかにし、病気に打ち勝ち、新しい物質を創り出し、地球とその環境を理解し、物質の性質を深く見て、宇宙の理解に達する知識を得ることです。今日の基礎研究は、世界とその中の私たちの考え方を拡大し、将来の繁栄と雇用の基礎となる明日の技術の基礎になります。しかし、英国の科学は危機に瀕しています。機会が失われ、科学者が移住し、研究の全領域が危機に瀕しています。政府の研究支援は、科学研究への投資を増やすようとしている欧州の主要な競合よりもさらに減っています。言い訳の余地はありません。救助のためには、北海の石油からの政府の歳入のわずかに約1%の支出の増加が必要です。私たちは将来のための英国の投資について、基礎研究をすることができます。手遅れになる前に、英国科学を救う手助けのために、あなたの(地域等の)国会議員に尋ねてみてください」

<sup>9</sup> “Never had it so good? : The Blair-Brown era has been a golden one for British science.” Nature 447, 231 (17 May 2007) (最終アクセス 2018年2月15日) <https://www.nature.com/articles/447231a>。

<sup>10</sup> 「我が肉体による労働と我が手の仕事」は、ジョン・ロック[1632-1704]の『統治二論 second treatise of civil government』に由来する。アーレントは、ロックのいうそれが、ギリシャ的な考え方に基づいていたこと、近代がこれらを「区別する理論の一つも生み出さなかった」ことを指摘した上で、更に次のように言っている。この区別が変わって、生産的労働と非生産的労働の区別、次いで、しばらくすると熟練作業と未熟練作業の区別が現れ、そして最後に、外見上はそれ以上にもっと見られたから、この二つの区別の上に、全ての活動力が肉体労働と精神労働に分けられた。」

<sup>11</sup> グラスゴー大学のハンタリアン美術館の展示によると、グラスゴー郊外に生まれた解剖学者であり、医師であった、ジョン・ハンター[1728-1793]は、啓蒙時代を「知識の改善」運動と呼んだ。

<sup>12</sup> ロンドンの科学博物館の展示「1823年のメカニクス・マガジン創刊号の複製」に基づく。その上には、翌年に出版された「グラスゴー・メカニクス・マガジン」も展示されている。

<sup>13</sup> Society for the Diffusion of Useful Knowledge: 1826年に発足し、主には、教育を受けられない人や独学を好む人たちのために有用な知識を提供する出版活動を行っていた。1848年に活動を終了。

<sup>14</sup> ロンドンのサイエンスミュージアムの展示, “The history of James Watts workshop”に基づく。

<sup>15</sup> ドイツ語圏の代表的な議論には、ヴァルター・ベンヤミンの『複製技術時代の芸術作品』(1936)や、マルティン・ハイデッガーの『芸術作品の根源』(1960)を取り上げることができる。フランス語圏の議論には、ロラン・バルトの『神話作用』(1957)や『物語の構造分析』(1979)など、ボードリヤールの『消費社会の神話と構造』(1976)を代表に記号と意味作用に関する議論が紹介できる。

<sup>16</sup> すでにサッチャー政権が誕生する頃には、英国でも、階級は軽視され、無視され、否定されるべきである、と考えられるようになっていた。歴史研究でも、もはや階級は時代遅れのテーマだと考えられるようになっていたし、マーガレットサッチャー自身、階級を重要だとは考えていなかった。中流階級の富の創出に期待し、彼らを企業経済の中心だと考えていた。しかし、1980年代初頭には失業者が多量に増え、貧困と不平等も拡大、再び富と貧という対立が根強く残っていることが確認された時期である。結果的にサッチャー政権が見せたのは、炭鉱におけるストライキと同様、権力を持つものと、彼らに操作され、支配されるという上下関係の構図であった。マーガレットサッチャー自身が階級についてどう考えていたにせよ、その時代の国民が見ていたのは対立や闘争のある社会であった。次のメジャーの時代になると、対立や衝突は、サッチャー政権期ほどは見られなくなっていた。メジャー自身、父親がサーカス団で働いていた経歴を持つことから、その出自と、その後の活躍や業績に至るプロセスが目撃されることが多い。そして本人は、1990年11月、首相になる少し前に、「階級はお終わった」という発言を残している。しかしそれは、分断のない社会というよりは、分断や階級が語られない社会であった。人々は、階級が終わったという言葉よりも、その実感あるいは、その先にある現実を求めている。ブレア政権は、総選挙の時から、新しい時代を求めながら、対立や衝突を超えた、共同体としての英国のイメージを提供することに成功したと言える。

<sup>17</sup> 例えば、フリードリヒ・エンゲルスは、マンチェスターという場所について、その「偽善的な町の作り方」を批判した。「組織的に労働者階級が大通りから引き離され、ブルジョワジーの目と神経を傷つける恐れのあるものを全てこんなに思いやり深く覆い隠しているところを、マンチェスター以外のどこにおいても見たことがない」。このドイツ語で書かれたテキストは、1845年に発表され、出版されたが、英国に持ち込まれたのは、1887年であった。エンゲルスがマンチェスターにいた頃、同じ年には、エリザベス・ギヤスケルという作家は、「マンチェスターの工場で働く大多数の人たちがどんなことを感じているのか、私が理解したことを、この物語の中に描こうとした」。エリザベス・ギヤスケルは、牧師の妻で、産業界や商人達とのネットワークがあった。その著作の一つ『メアリーバートン：マンチェスター物語』では、「私は、経済学についても商業理論についても何も知らない」という前置きを加えている。

<sup>18</sup> 例えば、地主階級は、「国教会の上位聖職者、法廷弁護士(裁判官)、内科医、高級官吏、陸海軍士官などとともに上流階級に、ブルジョワ階級は前記以外の各種プロフェッションの人々(事務弁護士、各種の開業医、牧師、薬剤師、技師、学校の先生など)、借地農、農民、事務員などとともに中流階級に属した(村岡・川北 130)。

<sup>19</sup> 具体的には次のように述べている。「企業者であることは職業ではなく、通常一般には永続する状態ではないから、企業者はもちろん研究者が分類上つくる集団という意味では一つの階級であるが―彼らはたしかに特殊な種類の経済主体であるが、同一個人に常に特有な種類のものではない―しかし「階級構成」とか「階級闘争」とかに関連して考えられる社会現象の意味での階級ではない。企業者機能の履行は、成功した企業者およびその一族に対して階級的地位をつくり上げ、その時代に刻印を残し、生活様式や道徳的、審美的価値体系を形成することができるが、しかしそれはそれ自体として何らかの階級的地位を意味するものでもなければ、これを前提とするものでもない。そして獲得された階級的地位はそれ自体としては企業者としての地位ではなくて、むしろ成功した場合にえられる私経済的成果の使い方に応じて、領主的地位とか資本的地位として特徴づけられるのである」(Schumpeter 1912)。また、「国より重要なのは階級だ。しかし、彼は無意識に忠誠を誓えるような社会、職業階級、専門職、あるいは労働組合の世界には属していない」とも言っている。

---

<sup>20</sup> 労働は、「人間の肉体の生物学的射程に対応する活動力」であり、仕事は、「人間存在の非自然性に対応する活動力」であり、「すべての自然環境と際立って異なる物の「人工的」世界を作り出す」ことである、活動は、「物あるいは事柄の介入なしに直接人と人との間で行われる唯一の活動力」であり、「地球上に生き世界に住むのが一人の人間ではなく、多数の人間であるという事実に対応している」。

<sup>21</sup> 1862年に出版された、全5巻から成る個人研究。歴史家たちの間では、「小説」として扱われることが多い。第1巻では初期の技術者、第2巻では、港、灯台、橋、第3巻では、道、第4巻では、蒸気機関（ボルトンとワット）、第5巻では、機関車（スティーブソン親子）というテーマで個人研究を行なっている。そのあとも、改訂版を出版、自然科学者や、ジョサイア・ウェッジウッドなどの起業家の本を書いた。その書籍は人気を博したものの、19世紀の最後の四半世紀になると、「彼の人気も下火になった。…スマイルズの英雄たちも、20年前のあの威勢を維持することができなくなってしまった」（Briggs 1955）。

<sup>22</sup> チューリングは、同性愛の罪に問われ、悲運な最後を遂げたが、2009年にブラウン首相は、このことについて政府を代表として謝罪し、2012年にはキャメロン政権によって恩赦が与えられている。ブレア政権期は、「人工知能の冬の時代」と呼ばれており、人工知能の進歩が『創造的な英国』などに大きな影響を与えたとは考えにくい。しばらくすると、統計的機械学習アプローチや分散処理技術が発展し、2010年頃には画像認識性能が飛躍的に向上した。なお、人工知能研究の起点とされるアラン・チューリングの功績は、2014年に映画化されている。